

前方・後方空間における注意配分と空間表象

森川 真充

鏡を用いて物体を知覚する場面は日常的に存在するが、直接知覚する場合と鏡を用いる場合の差異に関しては分からないことも多い。そこで本研究では直接知覚する場合と鏡を用いる場合の空間表象の差異を特に距離に関して検討した。

実験は、参加者の視点を固定し 300ms の観察時間のうちに机上の物体を記憶、その後に回答用紙に物体の位置を再生するという内容であった。その際、直接物体を観察できる条件と、机上の様子を鏡に映しそれを観察する条件を設けた。机上には観察の際の物体の位置関係の基準として黒色のカラーブロック（1辺が 2cm の立方体）を設置し定点とした。物体は定点を中心に縦 70cm×横 35cm の縦長の領域に呈示された。物体の数は 1・3・6 個のいずれかであり、定点と同じ大きさで色が赤、青、緑、黄、桃、茶の 6 色であった。参加者から物体の呈示領域までの距離は 142cm であった。

実験の結果、物体数と無回答率には比例の関係が見られた。実際に呈示された位置と回答された位置の距離の誤差を検討すると、直接観察する条件よりも鏡を用いる条件のほうが全体的に過大評価する傾向が見られた。この結果は類似の先行研究である東山・下野(2012)の研究結果と一致した。

距離に関して、物体が呈示された領域を参加者から見て前後半分に分け、手前側を手前条件、奥側を奥条件として詳しく検討した。その結果、直接観察する条件では全ての条件に対して実際よりも距離を過小評価する傾向があったが、鏡を用いる条件では手前条件の時に過大評価し、奥条件の時に過小評価する傾向があった。

手前条件と奥条件の距離の評価の差異から、直接条件の場合は日常的に観察者自身を距離の評価の基準にしているが、鏡条件は直接条件と異なり日常的な観察に不慣れなため鏡に映っている物体のいずれかを基準にして基準にした物体との相対的な距離を知覚している可能性が示唆された。(応用認知心理学)